

欧米社会学の合理的選択理論の研究動向の一整理

東北学院大学 久慈利武

○報告の目的

2012年 *Annual Review of Sociology* 誌に、ドイツ・マンハイム大学、クレメンス・クロネバーク、フランク・カルター共著サーベイ論文「合理的選択理論と経験的研究：ヨーロッパにおける方法論的、理論的貢献」が掲載され、そのなかの RCT ワイド版、RCT のコア仮説の豊饒化をてがかりに、2013 拙稿を発表した。そこでは、オランダ、ドイツ以外フランス（ブードン）、北欧（ヘドストローム）を含めることができなかったため、ヨーロッパの合理的選択社会学者群像 — リンデンバーク、エサー、オプ、ブードン、ヘドストローム」を名乗れなかった。本報告はその宿題を果たそうとするものである。

○第一の整理

2013 拙稿では、リンデンバーク、エサー、オプの相互の批判応酬に焦点を置いたが、今回の報告では、広いバージョンの主観的期待効用拡大のオプと、コア仮定豊饒化路線のリンデンバーク、エサー、ブードン、ヘドストロームの対決に焦点を置く。たまたまオプが広いバージョンの他の路線すべてに批判を展開しているため、それを手がかりにして、広いバージョン内部の対立、違いを浮き彫りにできた。図らずも、広いバージョンの他に比べて、オプのそれが脆弱さを露呈する結果となった。

○第二の整理

次に上記の軸の他に、オランダ・ドイツ圏の説明社会学（構造的個人主義）と北欧・英仏の分析社会学の軸からも彼らの合理的選択理論を比較してみた。2014年 *Kolner Zeitschrift* 誌特別号に掲載された前記フランク・カルターとクレメンス・クロネバークの共著「メカニズム・トークとメカニズム・カルトの間：説明社会学と経験的研究における新しい力点」、2016年 *Analyse & Kritik* 誌に掲載されたドイツ・トリヤー大学のアンドレア・マウアー執筆「説明社会学のスペシヤルケースとしての社会的メカニズム」が、この軸から合理的選択理論を対比している。

両陣営は、分析社会学が説明社会学の取るカバーリング法則説明を拒絶することから袂を分かった。カバーリング法則（マクロな社会学法則）の存在自体が疑われること、たとえ存在してもそれを用いた説明はブラック・ボックスを持ち（説明の非完結性）、更なる説明を要求することがその理由。もうひとつ両アプローチをわけけるものに、説明社会学は、人間行動についての法則めいた諸命題によって統一された知識群を目指すのに対して、分析社会学は多様な必ずしも両立可能でない行動仮定に基づいた社会的メカニズムの道具箱を準備することを目指す。したがって DBO 理論よりも Agent-based-simulation によるマクロ現象の説明に重点を移してきている。

しかし両アプローチの共通点として、マクロ・ミクロ・マクロ・スキームの採用がある。コールマン、ブードンが両陣営から同志と目されるのはそこに理由がある。

東北学院大学教養学部論集 第143号(2006, 2月)

拙稿「社会学における合理的選択研究のサーベイ論文をサーベイする」

東北学院大学 人間情報学研究 第18巻(2013, 3月)

拙稿「ドイツ語圏の合理的選択社会学者群像 — リンデンバーク、エサー、オプ」

の発展展開